世界最高水準の教育を受けながら、米国に関する知識を深めよう

世界中から毎年50万人を超える学生が、米国に留学してきます。そして、米国は、彼らを心から歓迎しています。皆さんがどのような話を聞いているかは分かりませんが、申請した学生ビザのうち、約80%は許可されています。

さらに、米国領事館は、過去２年間に、留学生受け入れに関する重要な変更を行いました。現在領事館では、特別なビザ面接予約時間を設けたり、場所によっては、学生が予約なしで来られるように時間を取っているところもあります。

写真提供　University of Georgia/Paul Efland

ニュージャージー州プリンストンにあるプリンストン大学の卒業生には、米合衆国大統領が２人、連邦最高裁判事が８人、ノーベル賞受賞者が29人もいます

国務省は、外国政府と連携して、学生ビザの有効期間を今までより長く設定し、留学生が学校の休暇中に容易に一時帰国できるよう、複数回の入国を可能にする、互恵的なプログラムの策定も進めています。

国務省は、学生が特定の期限までにビザを取得しなければならないことを理解して、学生ビザの申請手続きを迅速化する方法をもっと考え出すよう領事館に働きかけています。

2004年には、62万人を超える留学生が米国の高等教育機関に在籍していたのに加え、さらに32万2000人が、様々な大学交流プログラムの一環で米国を訪れました。

これらの留学生が米国の大学や教育機関で学ぶ理由は、米国人と同じです。すなわち、学問のレベルの高さ、大学とプログラムの種類の多さ、履修課程の計画を立てる上での柔軟性などです。

Photo Courtesy of the University of Georgia/ Paul Efland

ジョージア大学礼拝堂の完成は1823年にさかのぼります

米国の高等教育プログラムは、伝統的および先端的分野の研究で世界最高レベルにありますが、それに加えて、論理的考察、理性的分析、活発な議論を通じた自立的思考能力をはぐくむ取り組みを、高く評価されています。

わが国の学問環境は、文化と同様、幅広く多様です。キャンパスのほぼ全員と知り合いになれるような小規模な単科大学でも、あるいは寮1棟の学生数が小さな村に匹敵するほど大きな総合大学でも学ぶことができます。都市にある大学もあれば、農村部にあるものもあり、周辺に小さな町が発展している大学もあります。税金による補助金を受け、入学条件が緩やかな州立大学もあれば、入学基準がより厳しく、授業料その他の費用が高い私立学校もあります。伝統を重んじる学校もあれば、現代的なことを誇る学校もあり、２年制も４年制も、教養大学も科学研究大学も、男女別学も共学もあります。どのような学問的経験を求めていようとも、米国には大学が3700校もあり、その中から選べるわけですから、きっと希望に沿った学校が見つかるはずです。

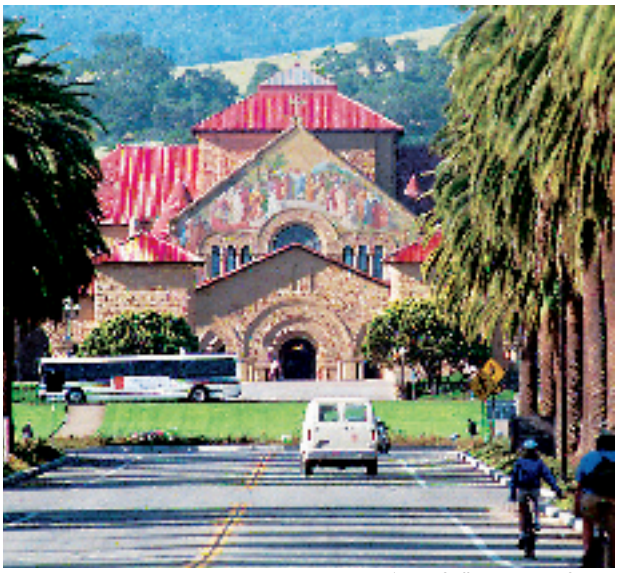
米国は教育を大いに尊重しており、だからこそ世界でもトップクラスの大学が数多く存在しているのです。私たちは、相互理解を促し、世界の進歩を促進する手段として、世界中からやってくる才能のある学生を心から歓迎します。ぜひ出願してほしいと思います。

米国の大学が提供するさまざまな学位取得プログラムや学位取得目的でないプログラム、受講可能な学校の種類、米国の教育哲学の説明、その他の情報については、http://educationusa.state.govをご覧ください。

AP/WWP Photo by Angela Rowlings
マサチューセッツ工科大学（M.I.T.）に在籍している、あるいは在籍していた研究者61人が、ノーベル賞を受賞しています。ボストンにある同大学に最初の学生が入学したのは1865年です

米国の大学に在籍する間には、選んだ研究分野について多くのことを学ぶ機会に恵まれるだけではなく、旅行や、米国人との日常的な接触を通じて、米国での生活について、短期滞在の観光客が学ぶよりもはるかに多くのことが分かるようになります。

これは胸の躍る経験かも知れませんが、難しい問題に直面する可能性もあります。食事も、おそらくは気候も、自分の国とはまったく違うかもしれません。新しい友人を作らなければならないでしょうし、ホームシックにかかることもあるでしょう。あなたが出会う米国人の行動や態度に面食らったり、いらいらしたりすることさえあるかもしれません。学校の勉強に加えて、町の歩き方、米国の銀行の利用の仕方、買い物の仕方、メートル法に基づかない寸法の理解の仕方などの基本を学ぶことが必要となるでしょう。



AP/WWP Staff photo by Paul Sakuma
スタンフォード大学では、ノーベル賞受賞者17人が教鞭を取っています

冒険心とユーモアのセンスの両方があれば、役に立つことは明らかです。

米国とその国民を間近で観察できるこの機会を利用して、皆さんが以前から持っていた先入観が正しかったかどうかを試してみてください。米国人が、想像以上に複雑だということがお分かりになると思います。

ですから、偏見のない広い心を持ってください。米国は自分たちの価値観や文化を持つ移民が次々とやってきたことによって築かれた国なので、さまざまな意見や基準があり、少数のステレオタイプに単純化することなど、とてもできません。確かに典型的な資質というものは存在します。米国人は一般的に、服装やマナーは形式ばっておらず、時に競争的で、時間とスケジュールを重視し、個人の自主性を大切にすることが分かるでしょう。また米国人は一般的に、友好的で率直、ユーモアがあり寛大で、目的達成を目指し、チームの一員としてがんばるプレーヤーであることも、分かると思います。しかし、このことだけは覚えておいてください。皆さんの国の人たちと同じように、このような「典型的」特徴を、ほんのわずかしか、あるいはまったく見せない米国人も、大勢いるのです。

Marsha Miller/The University of Texas at Austin PA Office
テキサス大学オースチン校は優れた図書館システムと、全国でもトップレベルの学問プログラムが有名です

米国留学という同様のスリルと期待に満ちた体験をしてきた人が他にも大勢いて、そのほとんどが、その経験は学問的にも個人的にも、非常に有意義だったと感じていることを忘れないでください。大学は、留学生が米国の大学というコミュニティーの中で居心地よく感じられるよう助力するので、安心してほしいと思います。

米国での生活を理解するために役立つ情報については、 *http://educationusa.state.gov/life.htm*をご覧ください。

人生の好機：米国大学への留学

デール･エドワード・ガフ
米国大学学籍入学管理者協会(AACRAO)　（ワシントンＤＣ）
国際教育サービス担当ディレクター
htttp://www.aacro.org

AP/WWP Photo by Victoria Arocho
ロードアイランド州ブリストルにあるロジャー・ウィリアムス大学で、プログラム参加者2人と歩く「アフガン女性教育イニシアティブ」の創設者ポーラ･ニルシェル

あなたが米国の大学への出願準備を進めている学生であれば、志願者の入学を許可するかどうかを決める上で、米国の大半の大学がどんな手続きを取っているのかを理解することが重要です。

米国以外の国では、自国の教育制度で教育を受けていない志願者が一般的な入学資格を有するかどうかを、教育省あるいはそれに相当する機関が決定します。しかし、米国では、それぞれの大学が自由に入学基準を定め、学生の学力がその入学基準に達しているかどうかを決定する独自の尺度を設定できます。

基準が高いほど大学の選抜は厳しく、入学許可を得るのも難しくなります。米国の大学は通常、１）選抜が非常に厳しい、２）厳しい、３）やや厳しい、４）自由入学制（学生の過去の学業成績にかかわらず入学許可を出すことができる）、という４つのカテゴリーに分類されています。

AP/WWP Photo by Alan Diaz
フロリダ州マイアミにあるフロリダ国際大学の大学書籍部の前に座るコートジボワール出身のムーサ・ダオ

従って、過去の学業成績が、ある大学の入学基準は満たしていても、他の大学では満たしていない可能性もあります。

志願者の過去の学業成績を審査し、入学に必要な基準に達しているかどうかを決定する責任は、大学にあります。

多くの大学では、学内の職員が志願者の過去の学業成績を評価します。また、米国以外で受けた教育の評価を専門にする機関に成績を送るよう、志願者に要求する大学もあります。大学が特定の機関を指定することもあるし、いくつかの機関が掲載されたリストを渡し、そこから選んでもらう場合もあります。こうした機関は、過去の成績を評価し、その結果を大学に提供しますが、入学許可を出すかどうか決定するわけではないのです。あくまでもあなたの入学許可の決定をするのは、出願先の大学なのです。

提出するそれぞれの願書に書いてある指示に、綿密に従ってください。複数の大学に出願する場合、おそらく指示もそれぞれ違うはずです。どの大学も要件は皆同じ、と考えないでください。

過去の学業成績を評価するのが出願先の大学であろうと、指定された外部機関であろうと、過去の成績をすべて提出する必要があります。

AP /University of Southern Mississippi Photo by Steve Rouse
南ミシシッピ大学で毎年恒例の国際フードフェアで、韓国料理を振る舞う同大学英語学校の韓国人留学生

● 志願者は、過去の学業成績すべてについて、正式な、または証明された写し（出願書類では「成績証明書」と呼ばれることが多い）を、出願先の大学および成績審査機関に送ってもらう必要があります。「正式記録」というのは、学生が学んだ学校が直接、出願先の大学と評価機関の両方、またはどちらかに送らなければならないということを意味します。志願者である学生は、これらの成績を自分で郵送してはいけません。その場合には、「正式記録」と認められない可能性もあるからです。

● 英語で書かれていない学業成績は翻訳する必要があります。翻訳も出願先の大学と教育評価機関の両方、あるいはどちらかに送らなければなりません。大学や評価機関には、元の言語と翻訳の両方で学業成績を提出する必要があります。

● 成績の翻訳に際しては、特に指示に注意を払う必要があります。「正式」な翻訳、つまり「認定された」または「免許のある」翻訳者によるものを提出することを求められる可能性があります。しかし学生に十分な英語能力があれば、大学や評価機関によっては、学生自身に翻訳を任せる場合もあります。

● 外部試験は、米国の大学が入学許可を出すかどうかを決める手続きの重要な要素です。フランスのバカロレア、あるいはイギリスの前期中等教育修了試験（Ｏレベル）と後期中等教育修了試験（Ａレベル）の両方、またはいずれかのような、全国的に実施される外部試験を採用している教育制度で教育を受けた学生は、その試験結果の写しを送る必要があります。

● 学部レベル（学士号）の１年生に出願する場合には、大学進学適性試験（ＳＡＴ）や米国大学入学学力テスト（ＡＣＴ）のような、米国内の志願者にも通常義務付ける標準能力判定試験も受ける必要があるかもしれません。受けるべき試験とその手続きの仕方は、大学が教えてくれます。

● 大学院への出願者（修士号または博士号取得を目指す学生）は、一般大学院進学適性試験（ＧＲＥ）を、経営学修士（ＭＢＡ）課程に出願する場合は経営大学院入学適性試験(GMAT)を、それぞれ受けなければならない可能性があります。こちらも出願校が、大学院志願者に必要な標準テストやその手続きの仕方を教えてくれます。

● 英語が母国語ではない場合、あるいは英語が母国語ではない国や地域で教育を受けた場合には、学部志願者も大学院志願者も第２言語としての英語テスト(TOEFL)のような英語能力検定試験の結果を提出する必要があるかもしれません。教育助手として働くことを希望する大学院志願者は、英語で教える能力を有する証拠として、英語会話能力試験（ＴＳＥ）の受験を義務付けられる可能性があります。

Courtesy of Eastern Mennonite University
バージニア州ハリスバーグにあるイースタン・メノナイト大学で、一緒に芝生の上で勉強する留学生たち

● Ｆ－１、Ｍ－１（学生）ビザあるいはＪ－１（交流訪問者）ビザが必要な場合は、予定する在学期間が終了するまで十分な資金を受けられることを証明するものを提出する必要があります。米国のほとんどの大学では、学資の支援に関する用紙に記入するよう求めるか、あるいは提出すべき書類を指定します。通常、学資面の援助を誰がしてくれるのか、その概要を記述する用紙に記入するほか、その根拠の提出も求められます。学資関係の書類についても、注意深く指示に従ってください。

● 提出期限は、非常に重要です。願書に列記してあるさまざまな期限に、特に注意してください。留学生の場合、入学許可

AP/WWP Photo by Jon C. Hancock

ウェストバージニア州アセンズのコンコード大学の留学生センターで、インターネットを閲覧する日本人留学生

を出す手続きに要する時間は、米国人学生より長くなります。ほとんどの大学で、留学生を対象にした願書受付締め切り日は早く設定されており、願書が締め切り日前に到着していることが不可欠です。米国の多くの大学には、海外の学生から、毎年、何百通、何千通という願書が届きます。自分が希望する学期に入学許可をもらいたい場合は、すべての必要書類を、提示された期限までに提出する必要があります。

● EducationUSAの相談センターが近くにあれば、訪ねてみることを強くお勧めします。EducationUSAの事務所では、スタッフが、米国の大学への出願に関する情報を提供してくれます。特定の大学に関する情報も持っていますから、願書を提出する大学を選ぶのを助けてくれます。最寄りの米国大使館でEducationUSA事務所の場所を教えてもらえますが、www.educationUSA.state.gov/centers.htm でも詳しい情報を得ることができます。

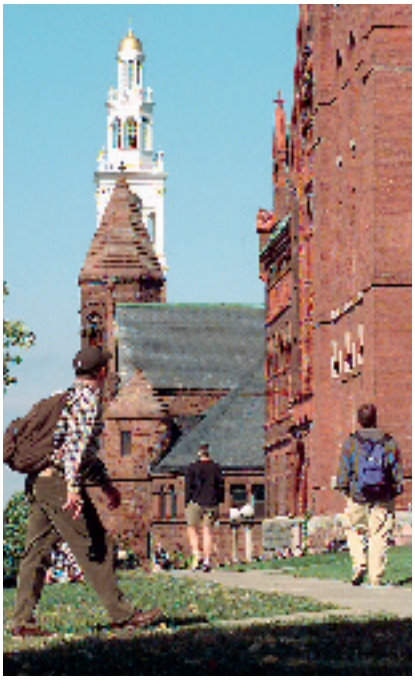
米国留学では、多くの刺激を感じ、得るところも大きいでしょう。最高な形で留学をスタートさせるためにも、各大学の指示に注意深く従ってください。出願手続きや提出物に関して質問があれば、興味のある大学に連絡して、疑問点などを明らかにしてもらい、助言を求めるといいでしょう。

米国の高等教育：学資面について

ナンシー・W・ケテク
国務省アフリカ担当地域教育指導コーディネーター
（在ガーナ共和国米国大使館）

米国の大学へ留学を希望している方であれば、米国では、中央政府が教育制度を管理している国に比べて教育費が高いことに気が付いたかもしれません。しかし、米国の教育は、コスト・パフォーマンスも極めて高く、投資に対する見返りが大きいことにも気付いていただけたと思います。

米国で教育を受けると、学生は自分が選択した研究分野はもとより、実践的経験、参加型の実験作業、世界で最も先進的で最も潤沢な資金に支えられた施設（米国の大学が2004年に、400億ドルもの研究資金を付与されたことをご存知でしたか）、論理的に話し、書く能力の育成、ネットワーキング、そして学生の向上心を後押ししてくれる教授陣との親しい関係など、それ以上のさまざまなことを経験できます。



AP/WWP Photo by Toby Talbot

Kaplan/Newsweek College Guide 2006年版による「アメリカで最も人気のあるトップ25(America's 25 Hot Schools)」のひとつ、バーリントンにあるバーモント大学のキャンパスを歩く学生たち

学問分野に加えて、米国の大学は住居設備、クラブ、学生組織、スポーツ・レクリエーション施設、インターン制度、他大学との交流など、学生の視野を広げ、帰国したときに社会を動かす大きな力になれるようにするための各種制度を誇っています。

幸いなことに、慎重に計画を練る志の高い学生は費用を抑制することが可能ですし、在籍する大学の奨学金を受ける資格を持つこともできます。

米国留学のための学費を抑制する方法を、いくつか挙げます。

● 最寄りのEducationUSA相談センターに行けば、受けられる可能性がある米国でのすべての学資援助について、包括的で最新かつ正確な、先入観のない説明を受けることができます。同センターは米国国務省の支援を受け、留学希望者向けの情報を提供する公式機関です。最寄りのEducationUSA相談センターについては、http://www.educationUSA.state.gov/centers.htm で検索できます。

● 自分の米国留学費用をどのように賄うかについて、両親と相談してください。両親（およびその他の親族）に、学費として毎年どの程度支援できるのかを聞いたうえで、その数字を４倍し、通常、学士号を取るのにかかる４年間に必要な学費の総額を出します。この「家族負担」と呼ぶ金額が、出願する大学を決める基準になり、予算と比べて費用が高すぎる場合には、出願を思いとどまらせてくれる要素になります。

● 自分にとって最適な大学に求めるほかの特徴についても考慮してください。例えば、規模、立地、生活環境、研究分野、特別プログラム、在籍する学生の特徴などです。優に3000校を超える大学の中から、自分が探している学校を見つけるのに役立ちます。

● 留学生にとって直接関係のある情報、つまり入学条件、学費、奨学金などの情報を提供してくれる、専門の出版物があります。EducationUSA相談センターで一読してもらいたい２冊の本は、*The College Board International Student Handbook* と、*Peterson's Applying to College and Universities in the United States*です。

後述する大学の学資援助のほかに、米国で高等教育を受けるための資金の出所は、次のようなカテゴリーに分類できます。

家族資金：米国で学ぶアメリカ市民と学部留学生にとって、最も一般的な財源です。大学教育の費用に関して一義的な責任を負うのは個人とその家族だというのが、米国人の考え方です。

大学が提供する資金：　家族資金の次に一般的な教育資金源です。成績に基づいて支給される（学業成績に応じた奨学金）場合と、学資が不足しているときに支給される（学資援助）場合があります。

スポーツ奨学金：大学が提供する、別のタイプの資金です。綿密に計画を立てれば、ひとつのスポーツに秀でている外国人学生は、その技能を活用して、米国での学資を手に入れることができます。

企業または特定の組織のスポンサー：米国あるいは外国の民間組織からの資金援助は、学生とスポンサーとの間の個人的取り決めの形をとることもあれば、選抜した候補者間の競争になることもあります。企業、公的機関、あるいは宗教団体が学生の後援を約束した場合、その後援が間違いないことを、学生が同意したすべての条件（返済や将来の雇用など）に関する詳細も含めて、詳しい資料を提出すべきです。

財団および国際機関：国連のような著名な機関は、特定の国の開発の優先順位に応じて受給者を選抜しています。受給者は、学部生ではなく、主として大学院生です。

自国の政府：自国政府が、海外教育プログラムを支援していないかどうか、確認してください。

米国政府：米国政府主催のプログラムは、ほとんどが大学院生を対象としています。これらは、２国間合意に従い、米国大使館広報・文化交流部（ＰＡＳ）または米国開発庁（ＡＩＤ）を通じて実施されています。

奨学金斡旋業者：不正な奨学金斡旋業者も多いため、注意が必要です。原則として、いわゆる「奨学金斡旋」業者が、情報提供の手数料を取る場合は、いかにパンフレットやうたい文句が立派でも、極めて慎重な対応が必要です。

大学の学資援助：その仕組み

留学生間の学資援助獲得競争は、非常に厳しくなっています。個人の資金に限りのある学生が、競争を勝ち抜き、最大限の学資援助を受けるには、特別に優秀でなければなりません。学資援助を申請する留学生は非常に多いので、選抜委員会から好意的な評価を受けるには、基本的な能力をはるかに超える力量を備えていなければなりません。高額の援助獲得を目指して競争する学生は、優秀な学生の中でも特に抜きんでていることを示さなければなりません。

EducationUSA相談センターのアドバイザーは、効果的で説得力のある申請書の作成の仕方について助言してくれます。相談センターには、小論文の書き方や、その他の入学手続きに関する役立つガイドブックが備えてあります。

援助の金額や援助を受ける学生の数は、大学によって大きく異なりますが、大学で学ぶ費用の全額を賄えるだけの資金を支給してくれる大学は、ほとんどありません。留学生向けの学資援助の予算や方針は、各大学が設定しており、米国市民への援助とは別枠で運営されています。

留学生に対して最も多くの学資援助を行っているのは私立の教養大学で、私立の研究大学がそれに続きます。各州が運営する公立大学と２年制大学（コミュニティーカレッジ）は、私立大学ほど学費が高くないのですが、留学生に学資援助を行うことはめったにありません。大学によっては、特別な事情があるか、あるいは学生が１年目の学業を終了（そして学費の払い込みを完了）した後に、援助を申し出る可能性もあります。

学資援助が必要な学生は、大学を選ぶ手続きを、少なくとも１年以上前に始めてください。そうすれば学資援助をしてくれそうな先を探して見つけ、必要な試験を受け、決められた期限までに願書と学資援助の申請書の提出を完了するのに十分な時間を取れるでしょう。

AP/WWP Photo by Pat Sullivan
テキサス州ヒューストンにあるライス大学は、常に米国高等教育の「ベストバイ（お買い得）」大学にランクされています

教育費を抑制する方法

教育費の抑制は、奨学金制度の創設と同じくらいの効果があります。費用削減の可能性を過大評価してはいけませんが、教育支出を最小限に抑える方法を探すことをお勧めします。次のような方法があります。

● **ベストバイ（お買い得校）：**最も質の高い教育を最も安い

費用で提供する大学を見つけること。EducationUSAのアドバイザーは、「お買い得の」教育機関を判別するための本や雑誌を教えてくれます。

● **履修期間の短縮：**４年間の学士課程を３年間で済ませれば、何千ドルもの節約になります。学生が履修期間を短縮するには、（ａ）学期ごとに講座をひとつ余計に取る（特定の事例に限る）、（ｂ）夏期講座を取る、（ｃ）授業料が安く単位の振り替えが可能な場合、近くのコミュニティーカレッジの講座を取る、（ｄ）自国で修了した大学レベルの課程（英国のＡレベルやフランスのバカロレア）について単位を振り替える、といった手段を取ることができます。実力試験を受けたり、ＳＡＴの科目テストの得点を提出したりすれば、大学の方針次第で、単位として認められる可能性もあります。

● **州外授業料の減免：**州によっては、成績優秀者やリーダーシップを発揮したことに対する見返りとして、留学生に州内在住者並みの低い授業料を認めています。授業料の減免に関しては、入学審査職員や留学生アドバイザーに聞いてください。出身地が大学のある都市と正式に姉妹都市の関係を結んでいる留学生の場合には、州内在住者並みの授業料を支払うだけですむことがあります。

● **生活費:**　学生寮の管理人になると、寮費数千ドルを節約できます。寮の食堂で働くと、少額ながら給料もあり、食事も付いています。キャンパス外で親族や友人と共同生活するのも、住む場所が適当で、効率的な公共の交通手段がある場合には、お金の節約になります。

AP/WWP Photo by Daniel Miller

オハイオ州トレドにあるオーウェンズ･コミュニティーカレッジのようなコミュニティーカレッジは、２年制の準学士号を授与しています

● **２年制のコミュニティーカレッジ:**　米国人学生でも、留学生でも、最初の２年間はコミュニティーカレッジに在籍し、その後４年制大学に編入して学位を取得し、授業料を数千ドル節約する人が大勢います。実際にこの手続きに入る前に、コミュニティーカレッジでの単位がすべて、学位を授与する大学に認められているかどうか確認してください。

● **仕事：**移民規則では、Ｆ－１ビザの留学生が、キャンパス内でパートタイムの仕事をすることが認められています。学生は通常、学期中は週10～15時間、休暇中はフルタイムで働くことができます。現実的には、パートタイムの収入を、書籍、衣料、小遣いなどちょっとした支払いに使うことはできますが、大学の授業料を賄うには不十分です。大学キャンパスでは、食堂や図書館での作業など、さまざまな就業の機会があるかもしれません。学生の学力レベルが上がれば、研究助手や講師などの仕事を得て、自分の研究を進めながら金を稼ぐことも可能です。キャンパス内の仕事は、自分の生活費を稼ぐことを誇りに思っている米国人学生に人気が高くなっています。

● **ローン:**　学資援助の一環として留学生にローン貸付を行うことで、学資援助能力を高めている大学も多数あります。ローンは大学の管理下にある民間基金、もしくは金融機関が貸し付け、米国市民や永住者向けの連邦政府融資プログラムとは別のものです。米国市民、あるいは永住者がローンの返済を保証する連帯保証人となることが必要な融資制度もあります。ほとんどの大学が、留学生に法外なローンを負わせないように注意しています。

不可能なことはない

毎年50万人以上の留学生が米国の大学に入学し、学資援助を受けているとしたら、あなたにもそうすることが可能なはずです。一生懸命勉強すれば、人生が急速に前進し、目標を達成でき、想像もしなかったようなチャンスが与えられるので、その努力は報われるでしょう。

「決して悔いのない決断」

ニャシャ・カンガンガ
出身国：ジンバブエ
セント・キャサリン大学
化学工学専攻学部生
ミネソタ州セントポール

外国で勉強する場所を選ぶことは、人生における最も難しい決断のひとつです。誰でも、ホームシックで孤独感にさいなまれるようなことがない場所、要するに、できるだけ完璧な場所を見つけようとします。私の場合、相談センターの助けを得て、これまでの人生の中で最善とも言える決断をすることができました。そして、ミネソタ州のセント・キャサリン大学へ入学しました。センターの人たちは、私を見ただけで、私の夢の実現にとって必要なことや行くべき学校を明確に察知したかのようでした。

写真提供　Nyasha Kanganga

セント・キャサリン大学のノラ・ホフ国際プログラムサービス部次長（写真左）、エイミー・ソーステンソン国際学生部次長（右）の間に立つニャシャ・カンガンガ

米国は素晴らしい国で、実際に生活してみると、テレビや映画などで見るよりもはるかに良い国だということが分かります。米国人は十人十色で、典型的な米国人などというものは存在しないと思います。1人に会ったからといって、米国人全員を知ったことにはなりません。ミネソタ州に住む米国人は、異民族や異文化に対してとても寛容で、文化的多様性を尊重してくれます。自然のままの私たちを受け入れてくれるので、周りの人たちと同じように振る舞う必要は全くありません。そのことを私はとても感謝しています。

米国で学ぶことで、世界が抱える多くの問題について、私の考え方が一変しました。これまで受けてきた教養科目教育のおかげで、私は物事を批判的に考え、問題をあらゆる側面から分析し、自分の意見に偏見がないか注意するようになりました。また、物事を前向きに考えることができれば成果が上がることも、また自分がやると決意したことは何でも達成できるということを学びました。

私は化学工学の修士号を取得し、ジンバブエの化学産業が有名になるよう、手助けするつもりです。

こちらの国際学生部のスタッフの支援は、賞賛に値します。スタッフの皆さんは、私を一から十まで助けてくれました。私はホストファミリーを世話してもらいましたが、そのホストファミリーは、私を空港まで迎えに来てくれ、また学生寮に落ち着くのを助けてくれました。そして私が努力するのをとても支援してくれています。留学生対象のオリエンテーションプログラムの内容はとても詳しく、オリエンテーションが終わるまでに、キャンパス内を自由に歩き回れるようになっただけでなく、近くの商店街にも1人で行けるようになったのです。

私は、最初の学期に「アフリカの夕べ」の司会役を進んで引き受けました。これはアフリカ諸国からの留学生にとって、アフリカの生活を大学の仲間たちに紹介する機会となる年1回のキャンパス恒例行事です。当然のことながら、300人を前にして話すのは私にとっては神経がすり減るような経験でしたが、お陰で緊張もほぐれました。私は、次年度のセント・キャサリン大学留学生会副会長に選出され、今とても張り切っています。

また秋学期には、学生寮の寮監を務めることになります。これにより、他の人々の学生経験に対する私の理解と認識が深まるとともに、私が初めてここに来たときに受けた「暖かい歓迎」をセント・キャサリンのコミュニティーにお返しできると思います。

米国留学を希望する学生たちに対して言いたいのは、その決断を後悔することは決してないということです。米国の大学制度は世界でもユニークで、教養科目の教育は私たちが体験し得る最も素晴らしい経験のひとつです。

「驚くような体験」

アルナブ・バス
出身国：インド
カーネギー・メロン大学エンターテインメント・テクノロジー専攻大学院生
ペンシルバニア州ピッツバーグ

私は、米国の大学への出願に際して、米国教育財団のインド・バンガロアセンターに何度も問い合わせをしました。同センターの支援は出願に不可欠なものでした。細かい質問に常に答えてくれましたし、それが入学選考手続きに関することであろうが、ビサ申請に関することであろうが、渡航情報であろうが、最新かつ重要な情報を提供してくれました。身上書作成にあたりセンターから得たフィードバックは、入学許可を得るためだけでなく、自信を持って自分で定めたキャリア目標の達成を目指すためにとても役立ちました。

私が選んだプログラムは、将来進みたいと思う業界に実際に触れる素晴らしい機会を与えてくれました。私たちは、会議や討論会に参加したり、写真現像スタジオを見学したりしました。また、カリキュラムが柔軟で、興味や関心に従ってコース選択ができることは非常に有益です。

集中的で具体的な講義は、学部の学習を基礎にして自分の力を高めるために役立ちました。また、私のプログラムは、素晴らしい学習の機会であるだけでなく、将来の就職先への足掛かりともなるインターンシップを設けるという点でも、多くの道を開いてくれました。

写真提供　Arnab Basu

大学に戻る前にすでに専門的な職業に就いて働いていた経験を持つ学生が多い環境に入ったことで、私は、関連する実務経験を持つことの重要性を評価できるようになりました。また、さまざまな経歴を持つ数多くの有能な人々の中に入って一緒に学ぶことで、私は新しい考え方に触れることができ、新たな機会にも恵まれました。

各学期に行う実演プロジェクトにより、相当の責任が要求されるプロとしての仕事をこなすための、十分な自信と心構えを身に付けることができました。

各人の興味と能力に応じて学生の進路指導をしてくれる教授陣を得たことも、幸運でした。

カーネギー・メロン大学のスタッフは、留学生の面倒をとても熱心に見てくれます。

カーネギー・メロン大学では、折に触れて国際フードフェスティバルが開催されます。その都度、世界のひとつの地域に関連したテーマが選ばれます。このフェスティバルは、知らない人々と出会うためにも、さまざまな国からやってきた学生のことを知る上でも、絶好のチャンスです。

米国の人々との交流は、素晴らしい経験です。特に、大学というアカデミックな環境の中で、私は、キャリア目標の達成に向けた米国人の集中力と熱意を高く評価するようになりました。米国人という、実に多様な人々との交流もまた、素晴らしい学習体験です。

初めてここにやってきた学生は、先入観を持たずに、1日目からできるだけ多くのことに、どっぷりと浸かるつもりで臨むべきです。ここでは、すばらしいチャンスを得ることができますが、猛勉強と忙しい生活は覚悟しておいてください。

それから大切なのは料理を覚えることです。新しい友人を見つけるには、長い時間がかかるものです。

「素晴らしい機会」

パベル・レピュスキー
出身国：ベラルーシ
イサカ大学元学部生
法学部科目履修生
ニューヨーク州

ベラルーシのゴメリ市のEducationUSA相談センターには、とてもお世話になりました。様々な教育機会の情報が容易に入手できただけでなく、留学試験の準備の仕方についての実践的なアドバイスも得ることができました。しかし、さらに重要なことは、卒業生同士で連絡を取り合い、地元の活動やプロジェクトを計画する上で、この相談センターが大きな役割を担っていることだと思います。

自由な発想や、現代社会の様々な問題を批判的にとらえることができるようになったという点で、米国での教育は非常に有益でした。それ以外に私が得た最も価値ある経験には、次のようなことがあります。

写真提供　Pavel Repyeuski

* **キャンパスでの生活**：他国についての理解を深める機会が広がるので、キャンパス内の活動のほか、米国人やほかの国からの留学生との交流は重要です。
* **地域社会貢献活動への参加**：キャンパス内でエイズ犠牲者のメモリアル・イベント「エイズキルト」の企画に参加したことで、世界的なエイズ問題と地域社会におけるボランティア活動の重要性に対する認識が高まりました。
* **インターン制度**：ニューヨークの国連本部でインターンとして働いたことによって、国際機関と、これらの機関が民主主義の普及促進と人間の価値の増進に果たす役割についての認識が、すっかり変わりました。

これらの経験から、私はベラルーシに戻って非政府機関（ＮＧＯ）を組織し、国連のプログラムを支援するとともに、ボランティア活動と地域社会貢献活動に従事することになりました。

イサカ大学は非常に協力的でした。空港で大学の職員が出迎えてくれ、キャンパスでは暖かく受け入れてくれました。さらに、さまざまな問題を処理して、必要なときには支援してくれる助言者も決めてくれました。

筆記試験では、教官は（留学生に多く見られる）つづりの間違いや文法の誤りよりも、学生が書いた内容を重視してくれたので、私たちは外国人として差別されることなく適正な成績評価を受けることができました。

文化的・社会的な面でも、質の高い支援を行ってくれました。私たち留学生の多くが大学の休暇中もキャンパスに残るため、大学側は各種の日帰り旅行の計画や、冬休みに滞在できるホストファミリーの世話をしてくれました。

米国での教育によって、米国の文化や社会の仕組みと働きについての理解が広がりました。また、米国の歴史、文学、行政の講義は、民主主義の原理をより良く理解し、米国を異なる視点から見つめるのに役立ちました。

米国人一家と暮らした経験は、米国に住む一般の人々が自分と同じ価値を共有していることを知ることができたという点で、やはり非常に有益な体験でした。

イサカ大学で学んだ後に、私は奨学金を受け、競争率が非常に高いオックスフォード大学の法学修士課程を履修しました。私がこの競争に勝てたのは、米国留学のおかげだったと思っています。現在私はマンチェスター大学で博士課程を終えるところで、将来は学者になりたいと思っています。もし最初に米国に留学していなければ、私はとてもここまでたどり着けなかったでしょう。

米国留学で生き残るためのヒントを以下に示します。

* カルチャーショックは心配無用です。大してつらいことではありません。いつもの自分でいること。でも他人への思いやりは忘れずに。
* 自国にいる親が、必ずインターネットにアクセスできるようにすること。インターネットは最も速くて安いコミュニケーション手段で、自国を離れた孤独感を感じることがありません。
* 必要なことや分からないことがあれば、遠慮せずに人に頼んだり聞いたりすること。英語が（まだ）完璧でなくても、英語を話すことを恐れないこと。
* 自分の教育環境を最大限に活用するよう努めること。いろいろなクラブや会合に参加し、インターン制度やその他の自分ができることすべてを行うこと。
* 地元の友だちやホストファミリーとの関係を築いて、それを維持すること。
* 留学を楽しむこと。人生を変えることのできる、またとない機会なのですから。